◇ 換　流 ～ 壁体・屋根（構造体＋仕上げ）内（各材料毎）の空気の流れ。

夏季（雨季）の風向は主として．西南（二黒）・（入門）・（未・坤・申）．からの蒸し暑い．湿度が高い．風が多い。

冬季（乾季）の風向は主として．東北（八白）・（起門）・（丑・艮・寅）．からの寒い風が．（乾っ風(からっかぜ)）多い。

・西南面の壁体や屋根は．換流が悪いと日照熱により発水がおこりいたみが早く．壁内部・屋根裏では湿度が高いため（黴(かび)）が発生しやすくいたみやすい。

・東北面の壁体や屋根は．換流が悪いと日照が少なく乾っ風の為温度差により．壁外部・屋根面は低温多湿となりいたみが早く．壁内部・屋根裏では温度差により．結露しやすくなる。

◇ 寸　法 ～ 畳敷が発生により基準尺度（地域によって差がある）定形化。

日本の住宅平面は一般1間（1間(ひとま)(柱間)）すなわち6尺・7尺を基準としたものが古くから使われている。　畳が発生し．部屋（和室）は畳が敷きつめられるようになって．3畳．4畳半．6畳．8畳．10畳などと定形化し．設計を容易にしている。　建築材料もすべて3尺ないし6尺（3尺5寸 ～ 7尺）を基準としている。たとえば木材は軸部材には13尺2寸（14尺）もの〈継手・仕口を考慮して2間材となる〉．柱材には10尺（11尺）丈(じょう)もの．仕上げに使用板類には12尺（13尺）ものまたは6尺（6尺5寸・4尺）ものが多い。

単に材料だけの問題でなく．施工の上でも左官屋が足をふまえて左右にこてをひける幅が約1間。　一人前の大工がひとかんなでかけられる長さ約1間などといわれている．（ひき通しの場合は約2間位といわれている）。

住宅が大工(匠)の手にゆだねられていた長い間の習慣によるもので．近代化とは矛盾する点が多いが．しかし現状ではこの基準寸法にさからわずに建てることが最もむだが少なく安くなるというのが事実である。　とくに外まわりの柱を1間隔に建てるように設計すれば最も安くあがるとされている。〈京都町並民家の妻側の柱は通しで　間隔となっている民家が多い〉。

★畳敷が発生したころより．1間という長さにも地方による差があり．畳の寸法が異なり．また畳敷居室によって柱間の寸法が異なる。

○田舎間・関東間 ～ 関東・東北地方では．5尺8寸×2尺9寸

○中京間・九州四国間 ～ 東海・九州・四国地方では．6尺×3尺

○京間 ～ 関西地方では．6尺3寸×3尺1寸5分

○真の京間 ～ 特に京都地方では．6尺5寸×3尺2寸5分

以上の大きさで地方で異なった寸法で行われている。　したがって木材の市場規格も地域性がある。　高さ関係（内法）で床(畳面)から鴨居下端まで．5尺7寸．ややよい建築では．5尺8寸．が普通であって．したがってできあいの畳．障子．板戸．ふすまを買ってもまにあう。　転用(再利用)による資源が大切にされてきた。